

撮影ビジネスの現場から
いまを伝える情報誌

スタジオ

昭和56年9月4日 第3種郵便物認可 令和5年2月10日発行(毎月1回10頁発行)通巻第47巻第446号 ISSN 0913-4816

2023

2

NOVI



KATACHI PHOTO PROJECT 代表・藤田 温氏は、2014年に自己免疫性脳炎を発症。一部記憶をなくした経験から記録媒体に関心を持つようになり、想い入れのあった祖父母の家の解体前に撮影を決定した。以降、さまざまな事情で手放すことになった個人宅をはじめ、飲食店や商店、造船所などジャンルを問わず数多くの歴史を記録。海外に移住した家族に日本の実家を写真で届けるプロジェクトなど、いずれの撮影も企画立案から手がけてきた。記録に残すことの意義を伝える「キオクノキロク」を中心に、写真家としてどのような想いを込めて活動しているのか、話をうかがった。

家に刻まれた家族の風景を記録する「キオクノキロク」

「暮らし」の視点で切り取り、プリントというカタチに残す



KATACHI PHOTO PROJECT 代表 藤田 温氏

——写真家として活動するようになったのは。

藤田 温 (以下藤田) 氏 本格的に活動し始めた30歳から7年目を迎えました。大学卒業後、いろいろな仕事を経験しましたが29歳の時に病気(自己免疫性脳炎)に罹ってしまいました。それを機に「自分でできることは何か」を考え、選んだ道が写真でした。

「なぜ写真なのか?」それまで普通にやってきた仕事ができなくなり、社会に自分の居場所を失くしてしまったように感じました。それなら自分で居場所を作ろうと考え、そのためには自分のことで人様に喜んでもらえることをしなくては、と思ったんです。

元々私は多趣味なんです、そのなかでもとくに喜んでもらえることが多かったのは写真だったんです。とは言え、とくに知識や技術がないところからのスタートだったので、写真に込める「想い」を軸にして主体的になって動くことで、どれだけのことができるのか挑戦したいと考えました。

最初は同級生の家族を撮っていました。「写真館に行くほどではないが、ちょっとした日常生活のなかで誰かに撮ってほしいタイミングってない?」と訊いて回りました。日曜日に近所の公園で普段通りに遊ぶ家族の姿、そんな日常的な写真が喜ばれまして、人づてに広がっていきました。そこからまた別の人を紹介して下さったり、なかには「うちの会社のパンフレットも撮ってくれる?」と声をかけてくださる方もいました。そうして段々と自身の活動コミュニティが増えていくなかで「一般社団法人つむぐ」との出会いがありました。

——「一般社団法人つむぐ」での関わりは。

藤田氏 「つむぐ」は相続手続きの支援をしていて、そこにまつわるさまざまなサポートを行っています。相続には家の片付けをどうするかか付いてまわるのですが、家財整理など物理的な部分の支援だけでなく、心のケアの部分で何かできることはないか、と「つむぐ」から相談を受けたのがきっかけで関わるようになりました。私は写真家なので「写真を通じてアプローチしてほしい」とお話をさせていただき、そこから自身の「キオクノキロク」という活動へとつながっていきました。

——自ら代表を務めるKATACHI PHOTO PROJECTの活動内容は。

藤田氏 KATACHI PHOTO PROJECTとしてはさまざまな活動を行っており、七五三をはじめとする記念撮影もそのなかに含まれています。

一般的に写真館では限られた時間のなかで、お子様とコミュニケーションを取りながらハイクオリティな写真を撮られています。対して私は、写真関連の職場で仕事をすることがなければ、師匠という存在もいませんでした。そんな私がどういったところで勝負できるかを考えたとき、行き当たったのが「どれだけ人(お客様)に寄り添うことができるか」でした。未熟な自分でもそこだけは写真館に負けないように、とことんお付き合いしていきたいと考え、それが現在の活動へとつながっています。ありがたいことにフォトコンテストの3年連続受賞(明治安田生命マイハピネスフォトコンテスト2019~2021年)や、さまざまな刊行物の制作に携わらせていただいておりますが、それらもすべて人様との出会いに恵まれた賜物だと思います。

写真家としての活動は、写真に対する自らの「想い」が先行しましたが、そこからお仕事を通じて写真の技術や知識を磨かせていただけてきました。写真で人どのように寄り添えるか、それはたとえば撮り方を1つととっても、いろいろな角度があり、そこに集中していくことで、そのときの自分に足りない技術だったり知識が見えてきて、それをクリアしていくことを積み重ねてきました。

写真を見て「帰れる実家があることに安心」

——家に刻まれた暮らしの記憶を記録する「キオクノキロク」について。成果物(アルバム)を見たお客様の反応は。

藤田氏 私が最初に手掛けた「キオクノキロク」は、亡くなったご両親が住んでいた日本の実家を、海外で暮らす娘様が「つむぐ」に依頼をして整理をするというものでした。「つむぐ」から私には「依頼主である娘様が最後に家を見ることもなく処分されてしまうのはいかなものか」という話があり、「それなら家を撮影して、アルバムにして届けよう」ということになったんです(30~31ページにその一部を掲載)。

私は建物を撮影するのではなく、「暮らしを残す」という観点で撮ろうと思いました。庭の様子や玄関を出たところからの風景も含めて、暮らしていた人の生活の目線で撮影することで「ああ、そういうの、あったなあ」と懐かしく感じてもらえたらなあと思ったんです。お母様が立っていた台所、お父様が座っていたソファから感じる家族の風景、生活の導線にあるインターフォンの受話器や擦れたドアノブなども撮影して、ご両親がいかに多くの人達に慕われていたのかが分かる部分も現場で感じたままに切り取っていきました。

その日は撮影と同時に遺品整理も行われていて、片付けを進めていると、ご家族で撮られた家族写真アルバムがたくさん出てきたんです。「こういうアルバムがたくさんあったという記憶」を残せたらと思いレンズを向けました。

そうして撮った写真をキオクノキロクのアルバムにして、海外に在住する娘様にお送りしました。これほどリアリティあふれる実家の写真が届くとは思ってもいなかったようで、大変驚かれるとともに喜ばれました。



家の処分や引っ越し、住人の施設入居などのタイミングに、その家に刻まれた暮らしの記憶を記録する「キオクノキロク」。不動産や工務店、遺品整理、介護施設、行政等、住まいの区切りに関わる業種とのコラボレーションを展開。こうした活動を通じて、コーポ企業への付加価値付与や不動産持ち主の心理的負担の軽減などといった効果が見込まれている。個展の開催やメディアでの発信などを通じて周知徹底を図っている。

ある日、ご本人様からお電話をいただいたのですが、実は元々、実家は好きではなかったんだそうです。でも「写真を見て泣いた」と。人それぞれに実家って良いことも悪いことも含め、いろいろな思い出が詰まった場所なんですよ。その娘様は「悪いことばかりが先行してしまっていたけど、(写真を見ることで)帰ることができる実家があることに安心できた」と言ってくださったんです。

私も、実家ってそうあるべきだと思うんです。ふとしたときに帰ることができる場所。そして、そんな場所を、いつまでも心に残しておくことができるのが写真の持つ力なんだと思います。

写真には大きな役割として『記録』『表現』、そして『伝達』が挙げられます。「つむぐ」から受けた初めての仕事は、私にとっても挑戦になりましたが、キオクノキロクは自分なりの記録や表現、そして伝え方を1つのカタチにできたと感じています。

相続においては、揉めてしまうことも多いと聞きます。なかには「実家なんて見たくもない」と嫌悪感を露にする人もいて、先の娘様もそういう1人ではあったんですが、それを写真によって気持ちを伝えることができたんだな、と。逆に言えば、そういう力も写真にはあるということを実感しました。

約9割が「持ち家」を有すると言われている団塊の世代が引退され、そこから10年、20年と経つにつれて相続の問題が浮上し、それに直面するのが団塊ジュニア層、今の私よりも少し上の世代になってきます。結局、「(家を)片付けるしかない」と考える方たちに写真で家を残す選択肢があるということ、その概念をもっと広めていきたいと考えています。

1枚の写真から思い出すことのできる 日常のエピソードをみんなで語り合う機会に

——2023年をどんな1年にしたいか。

藤田氏 家を残したくても残せない、やむを得ず片付けなくてはいけない、という方たちもいます。そういう方たちに、キオクノキロクの活動について話をさせてもらおうと、「もっと早く聞きたかった」と言われることが多いんです。

なかには、無理をして(家を)残そうとする方もいるんです。「実家に想い入れがあるから」と頑張ろうとして、固定資産税を支払い、維持管理をするも、結局は長く続かないケースもあります。やがて家は朽ちていき、最終的には強制解体せざるを得なくなることもあります。これって誰も幸せになっていないように思うんです。なので、私は引き続き撮影を通じて、そういった方たちのケアをする活動に注力していきたいと考えています。

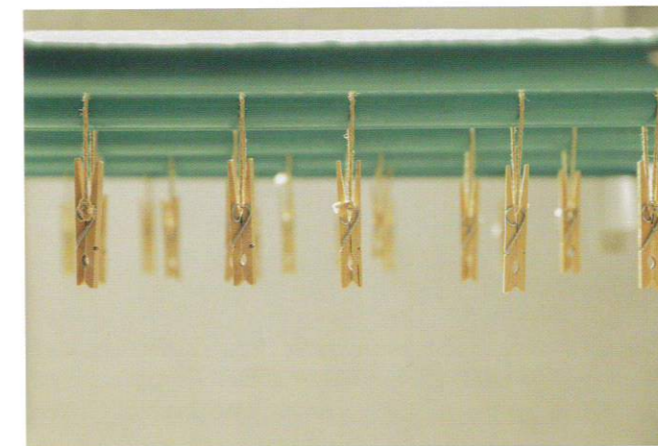
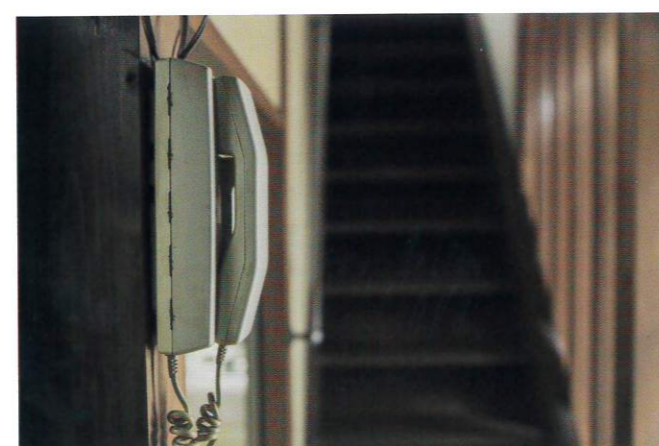
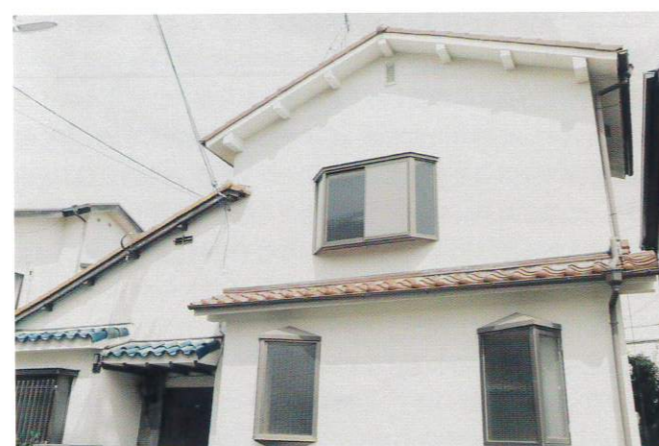
——そうした撮影活動は、一般的な家族の記念写真とは違った意識か。

藤田氏 違うと思われがちですが、根本的な気持ちの部分としては一緒なんです。私の写真家としての活動は、家族の日常スナップ撮影からスタートしましたが、「キオクノキロク」というのは、ある意味究極の「家族写真」だと感じています。

ご家族が暮らされていた家に撮影に入らせてもらおうと、そのご家族特有の癖という空気というか、そういったものが刻まれているのを感じるんですね。たとえば、ベランダに行くとお母様お手製の物干し竿があって、均等に並ぶ律儀な洗濯ばさみを見ると「あ、お母さん見つけた！」って思うんです。とても几帳面な方だったんだなって。そういうシーンに遭遇すると思わず「お邪魔してます！」って頭を下げて1人で喋っちゃってます(笑)。

他にもお子さんが背を測るとき、柱に傷(印)をつけるご家庭ってありますよね。これもそんなエピソードの1つなんですけど、姉弟が毎年競うように名前と日付つきで身長を測っていた跡が柱に刻まれていた家があったんですけども、ある日を境に弟の名前だけになってたんです。「お姉ちゃん、悔しかったんだね(笑)」って。撮影現場にいて、そんな日常の様子がファインダー越しに伝わることが多いんです。

「キオクノキロク」では、撮影前にご家族様からできる限りエピソードをヒアリングさせていただいていますが、うかがったお話と実際に現場で感じるものから絵(ストーリー)を描いていくのが好きなんです。いろいろとつながってくると、私自身も楽しくなります。ご家族様の知らない、たとえばお父様のお茶目な一面とかを発見すると嬉しくなりますね。それって残されたご家族様にとっても貴重な写真で、想いがカタチになって残ります。そういったところにも、写真家としての活動の意義を感じています。



介護の現場でも入居者との重要な コミュニケーションの役割を果たす写真

——写真家として、今後も大切にしていきたいと思うことは。

藤田氏 個人的に思うのは、AIがますます進化すると、カメラが喋り出すようになるのではないかと。「もう少し上に向けて撮りましょう」みたいなガイドや、その精度が格段に高まる可能性もあります。

そうすると、写真家は単に技術があるだけではダメだと思うんです。写真家として活動するうえでは、その撮った写真をどのように使うかまで、一歩踏み込んで考えていくことが重要ではないでしょうか。「キオクノキロク」も、もっといろいろな使い方があるように感じていますし、もっと考えるべきだと思っています。

2023年3月に大阪のお寺で個展を開催することになっているんですが、そこのお寺の方からは「キオクノキロクってグリーンケアですよ」と言ってくださいました。大切なものを失うなど、そうした喪失感をケアするうえで「キオクノキロク」が果たす役割は大きく、さらに多くの方たちに届けるべきものではないかと。

長年住んできた家なら、尚のことなんです。以前、私は介護の仕事に3年ほど携わっていましたが、「キオクノキロク」を介護の分野にもつなげられたら、とも考えています。

具体的には、施設に入りたくない(家を離れたくない)という方たちに対するケアという点が挙げられます。そういった方たちのなかには、施設に入ったあと不穏な雰囲気になってしまう人もいますよ。

なぜそうなるのかというと、家という自身の大切なものから離れてしまうという喪失感に加え、「家に1人でいると危ない(生活できない)から」などと言われ続けた果てに行き着いた場所という認識を持たれる場合があるからです。そう考えてしまうと、救いのないように感じてしまいますよね。

そこで写真という打ってつけのツールが生きてくるんです。入居者様の心のケアという面においても、また介護施設側からしても「キオクノキロク」のような写真ってありがたかったりするんですね。ご入居にあたり生活遍歴をうかがったりするんですけども、写真を通じて、その方がどんな家に住んでいたのか、具体的な生活感も伝わってくる貴重な資料であり、共通言語でもあるんです。

施設側としては、それを見ることで入居者様への理解度が深まり、いろいろな会話に発展する可能性につながると思っています。かつて私も介護する側の人間として「入居者様のことを理解したいのに、なかなか共有できない」というもどかしさを経験しました。

たとえば「将棋が好き」という言葉だけなのと、実際に擦り切れた駒の写真つきで話を聞くのとは、情報量がまるで変わってきますよね。

コミュニケーションを図っていくにあたり、写真がとても重要になってくるんです。介護をする側とされる側において「共通のイメージ」の有無は、サービスの質にも関わってくるんです。施設に入居される方たちには、「キオクノキロク」で制作したアルバムブックを持ってほしい。それが私の思い描く夢でもあるんです。そんなふうにも、「キオクノキロク」が使われる環境にしていきたいんですよ。



©Atsushi Fujita



©Atsushi Fujita

藤田氏が撮影した写真と、住人が当時撮った家のなかの写真を一冊のブックに構成して仕上げることも

今後も人の心に寄り添いながら 写真家としてできることを実践

——2019年に第1回目として開催した個展「キオクノキロク」と今春に行われる第2回目との違いは。

藤田氏 まず開催地が異なるのと、前回に比べて作品点数が増えた(お客様への納品用とは別に保管用としても制作している)ので、より多くの作品をご覧になっていただける機会となります。

今回も企画から関わらせていただいているのですが、個展会場であるお寺の方からは「檀家さんたちにも招待状を送りたい」という話をいただきました。一般の方に加え、檀家さんも対象に行う催しになります。

「今後、自分の家をどうしよう」と考えつつも後回しになってしまふ。そういった方たちにも、あらためて(家のことを)考えるきっかけになるような個展になればと思い、お寺の本堂で開催させていただくんです。ただ写真を見るだけではなく、介護関係や工務店など家にまつわるゲストの方々をお呼びして、写真を見ながら専門職の人たちと来場者の方たちが意見を交換する場を会場内に設けようとして計画しています。

参加型のイベントにしようと思ったのは、来てくださった方たちにお土産を用意したかったんです。私は人との会話や情報ってすごい価値があると思っているので、じゃあその状況を作っちゃえて。それに同じ家って存在しないんですよね。家族の数だけカタチがあって、考え方も異なります。今回、さまざまな職種の方たちをゲストに招きますが、それぞれの視点で来場者様と家のことを語っていただくと面白いのでは、という狙いがあります。

——デジタル時代、スマホ台頭時代に写真をプリントというカタチに残す意義、それをどのように伝えていきたいか。

藤田氏 プリントされなくなってきたのであれば、「プリントすることの意義」を見出していかないといけないですね。「キオクノキロク」では写真データとブックを必ずセットでご依頼していただくようにしています。「家に帰りたい」とふと思ったとき、ブックを気軽に手に取って、家族みんなで見て、そして語り合ってもらいたいと思っているからです。それにはやはりスマホやタブレットではなく、カ

キオクノキロク展

日程：2023年3月10～20日 10～16時

会場：應典院本堂(大阪市天王寺区下寺町1丁目1-27)

タチになった写真でないと意味をなさないので。手に取っていただきやすいカタチに仕上げているのですが、これがあるがたいことにお客様からも「このサイズ感がいいよね」と仰っています。

私も写真を生業にしている人間として、もっと写真業界を盛り上げていきたいと思っています。プリントされた1枚の写真に、あらゆるエピソードが肉付けされていくことで、最終的に「キオクノキロク」というカタチにすることの意味、説得力もさらにアップするのではないかと考えています。

もちろんデジタルにはデジタルの良さがありますが、それが何十年、何百年先も変わらずに見ることができるかは、デジタルかアナログ関係なく、そのときにならないとわかりません。どちらにしても私は「写真って今を生きる人のためのもの」だと思っています。であれば、少なくとも今の時代を生きる人たちにとって見やすく、かつ目的に沿ったカタチであるべきだと考えます。

スマホで写真を見ることもできますが、基本的にスマホは個人の所有物ですよ。そして家族写真は家族のものです。やっぱりみんなで見たい写真は、みんなが見やすい状態にするのが一番良いんじゃないかって思うんです。それって家族の記念写真や「キオクノキロク」に限らず、どんな場面でも言えることだとも思います。たとえば先日、私の近親者の葬儀のときにも、遺影の横にブックになった故人の普段の写真があれば、会葬者全員で偲ぶことができると思って、実際に斎場で見るとのものを作ったりもしました。

きっと写真のカタチって、まだまだ考えることができると思うんです。そんな可能性がたくさんあるなかで、私は写真家として「写真を人に寄り添うカタチ」にすることを、同じ志を持った人たちと一緒に、どんどん挑戦していきたいですね。